

「兵士たちはイエスを十字架につけて、その服を分け合った(マルコ 15:24)」。衝撃的なクライマックスなのに、十字架につけられた描写はただこれだけ。記述が綿密だと注意するが、逆にあまりにそっけない報告でも「こりゃ、なんじゃ」と考えてしまう。そして、何やらモヤモヤしたものが残る。

磔の作業をしたのは兵士だが、いったい誰がイエスを十字架につけたのか。呪い叫ぶ群衆はもとより(15:14)、通りがかった者も(15:29)、特権階級や勤勉な信仰者も(15:31)、イエスの傍らで処刑される政治犯でさえ(15:32)、イエスを罵っている。

「ののしり」という言葉には「神を冒瀆する」という強意のニュアンスがあり、イエスはあらゆる口から出るそんな「ののしり」を一身に受けている。

「ののしり」が投げられる十字架とは何であろうか。神の御心の転倒ではないか。人間の傲慢、それを反転させたキリストの無力ではないのか。神に従い御心に受け身であるべき人間が主導権を握り、反対に神の子が受け身になっている。

十字架上のキリストは、人間の罪を生々しく露わにする。人間の傲慢が、無力なキリストによって際立つことは分かったが、それにしてもなぜ無力なのか。仏陀も孔子もソクラテスも、「有力」な知恵と高潔な人格によってもろもろの「罪性」を露わにしたのに。

「わたしが受けている嘲りを、恥を、屈辱を、あなたをご存じます。わたしを苦しめる者は、すべて御前にいます(詩編 69:20)」。詩人の訴えは、あたかも十字架上のキリストじゃないか。人間は、あろうことか神の御前で、その傲慢さで神の御子を苦しめている。

「人はわたしに苦いものを食べさせようとし、渴くわたしに酢を飲ませようとし(69:22)」。この一節もまた、十字架と重なって響く。

なぜイエスは、感覚を麻痺させる苦い没薬を拒否したのか(マルコ 15:23)。「ののしり」を少しも漏らすことなく、人々の罪の隅々を、人間という弱い存在のまま、一身に負っていく決意からではないか。

キリスト者であれば、十字架をののしることはないだろう。だが神の御心を知りながら、それを折々の都合で二番手三番手にしていることは日常茶飯事ではないか。神に従おうと志しながらも、神にむかって己が主導権を行使する。そんな私たちの世俗っぽさは、無力なキリストと対を為している。

「わたしを苦しめる者は、すべて御前にいます(詩編 69:20)」。その御前で「イエスを十字架につけている(マルコ 15:24)」。御心を安く値踏みしているからだ。神はそんな人間に怒り、滅ぼそうとされたが、イエスがそこへ割って入るようにして十字架につけられた。

神の怒りは十字架で受け止められ、私たちは「キリストの血によって義とされ、キリストによって神の怒りから救われる(ロマ 5:9)」。

十字架によって神と「和解」している人間(5:10)。それほどに私たち一人ひとは、愛される存在なのだ。キリストの無力は、人間が誇る最高の有力を集めたよりも、深さと広さにおいて遥かに勝っている。「死も、命も、天使も～(すべて)～わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできない(8:38~39)」。キリストの無力は、神の愛にほかならない。

「兵士たちはイエスを十字架につけた(マルコ 15:24)」。十字架には、言葉では表しえない犠牲、赦し、自由、命、愛がある。だから福音書は、簡潔に「十字架につけた」とだけ語っているのかもしれない。



#### 《おまけのひとこと》

十字架の 無力なキリストに出会うと 己が有力を自覚する 創造主をさしおいて命や世界を語り 御心を算定する そして値切ったりもする 傲岸な有力に値切られて キリストは無一文になった